

「新学期に向けて 例えばこんなスタートも…」

2 5 0 4 0 4

学級開きに向けて準備を進めている真っ最中だと思います。真っ新な気持ちで登校してくる子どもたちとの出会いを大切にしたいという思いでいっぱいだと思います。こんな一文を見つけたので紹介します。

新学期が始まって最初の3日間を「黄金の3日間」と呼ぶことがあります。この時期の子どもたちは、「新しい学年だ。がんばろう」と前向きな気持ちに満ちあふれているため、素直に教師の話に耳を傾けます。つまり、教師が無敵状態の「スターマリオ」になっているようなものです。ただ、ゲーム同様、この無敵状態もあくまでも期間限定。いつまでも続くものではありません。新学期の当初の忙しさに身を任せていると、気づいた時にはこの状態は終わっています。「学級経営は最初の3日間で決まる」と聞いたことがある人も多いと思います。黄金の3日間のプランを立てることは、この春休みに行うべき最優先事項の一つです。その黄金の3日間の間に、私が特に意識して子どもたちに伝えていることが二つあります。一つは、悪い騒がしさを生まない「三つのルール」です。そして、もう一つが教師の所信表明でもある「伸びたか・伸びてないかにこだわる」になります。

始業式の日、楽しい自己紹介の後、表情を引き締めて話します。「今から先生が、一番大切にしていることを話します。それは、『できたか・できなかった』ではありません。『伸びたか・伸びていないか』ということです。テストで90点のAさんと60点のBさんでは、普通、Aさんの方が褒められます。でも、前のテストでAさんが95点、Bさんが20点だったとしたらどうでしょう。Bさんの方が頑張っていますよね。結果だけ見てBさんよりできているからと安心してAさんが努力しなければ、いつかBさんに追い抜かれます。人生のピークが5年生でいいのなら、それでもいいですけどね」ちなみにこの所信表明

はクラスの子どもだけではなく、保護者や同じ学年を組む先生、管理職にも伝えます。ただ、この話を始業式の日にして、そこで満足してしまってもはいけません。「三つのルール」同様、1年間を通してこだわり続けてください。黄金の3日間が終わった後も、教師は意識して手立てを打ち続けるということです。学校におけるすべての学習活動の場で、教師が「伸びたか・伸びていないか」を大切にしていることを子どもたちに伝えていきます。例えば、国語の時間の授業のまとめを書いた際、こう聞きます。「昨日よりたくさん書けた人？」そして、1行でも多く書けていたら褒めまくりです。「書く力が伸びています。素晴らしい」この時、質は問いません。特に1学期の間は量にこだわらせます。書いた量が増えているのかは、書いた本人ならすぐにわかります。つまり「自分が伸びたか・伸びていないか」について簡単に自己評価ができるということです。教師も3行書けたら丸、5行書けたら花丸というように量で評価して子どもたちのやる気をアシストします。量に比べて質が上がっているかどうかは、子ども自身にはわかりません。質については、教師が評価して一声かけてください。「この気づきは〇〇くんだけでした。すごい！」このように、1日の間に何度も子どもたちに「伸びたか・伸びていないか」を尋ね、評価していくことで、子どもたちも「できたか・できていないか」ではなく、「伸びたか・伸びていないか」にこだわるようになっていきます。勉強や運動が苦手な子も「できないから…」と諦めることなく頑張るようになります。友達を見る目も変わっていきます。

★悪い騒がしさを生まない「三つのルール」

- ①発表する人は立つ。
- ②誰かが立ったら手を止めて立っている人を見る。
- ③誰かが発表している時はしゃべらない。

(芦屋市立浜風小学校長 俵原正仁) 先生